

平成 14 年 11 月 7 日
国 土 交 通 省

連携施策についての情報交換

連携施策名 「子どもの水辺」再発見プロジェクト

1 . 背景

河川は、長い間学校教育等において「危険な場」とされ、子どもたちから遠ざけられてきたが、近年、地域に身近に存在する自然が多く残された貴重な空間として見直されており、今年度から小中学校において本格的に導入された「総合的な学習の時間」における環境学習等の場として注目を集めている。

2 . 目的

地域で活動する市民団体や教育関係者、河川管理者等が一体となって、それぞれの地域において身近な水辺における子どもたちの環境学習・自然体験活動等の推進を図る。

3 . 施策の概要（対象、内容、効果）

文部科学省、国土交通省、環境省の連携プロジェクトとして、平成 11 年度に開始。地域の市民団体、教育関係者、河川管理者等が連携して、「子どもの水辺協議会」を設立、「子どもの水辺」として登録し、水辺での自然体験活動等の推進を図るとともに、登録された水辺については、「子どもの水辺サポートセンター」(今年 7 月に(財)河川環境管理財団内に設置)において、活動に必要な資機材(ライフジャケット等)の貸出、水辺での活動をコーディネートできる市民団体等の人材の紹介、各種情報の提供等の支援を行う。

4 . 連絡先：河川局河川環境課

氏名 佐藤寿延 内線番号 35432

河川を活かした環境学習、自然体験活動の推進について

国土交通省 河川局 河川環境課

1. 川に学ぶ社会を目指して

平成9年に河川法が改正され、河川環境の保全と整備が法の目的に位置づけられるとともに、住民参加の手続きを伴った河川整備計画制度が導入された。これを契機に河川審議会に『川に学ぶ小委員会』が設置され、川に学ぶ社会を実現するためには以下の4つの基本方針が重要であるとした報告がとりまとめられた。

- ・人々の関心を高める魅力ある川づくり
- ・川に関わる正しく広範な知識・情報の提供
- ・川に学ぶ機会の提供
- ・川に学ぶ社会に向けて必要とされる主体的、継続的活動

現在、川に学ぶ社会の実現に向け様々な取り組みを行っている。詳細は国土交通省河川局ホームページを参照 (<http://www.mlit.go.jp/river/shinngikai/shingi/index.html>)。

2. 「子どもの水辺」再発見プロジェクト、水辺の楽校の推進について

家庭や地域社会を取り巻く環境の変化やライフスタイルの変化に伴い、子どもたちの自然体験や野外での遊び等の機会が少なくなっているといわれている。一方、水辺は危険な場所としてフェンスや柵をつけることが過去に行われてきたが、河川は子どもたちにとって身近な自然空間である。川を子どもたちが親しめる水辺として整備し、自然体験や環境教育の場として活用するプロジェクトを推進している。

「子どもの水辺」再発見プロジェクト

国土交通省、文部科学省、環境省の3省連携事業。

H14.5.29に市民団体主導による仕組みを導入。

今後、河川管理者、市民団体、教育関係者の3者が現地でスクラムを組み、水辺における活動を推進する。

この新しい仕組みの導入に従い、『子どもの水辺サポートセンター』を設置。各種情報の発信、ライフジャケットなど資機材の提供、人材バンクの整備、各種活動のコーディネート、川の指導者養成講座の開催などを実施。

水辺の楽校プロジェクト

「子どもの水辺」のうちハード整備が必要なものを水辺の楽校として位置づけ、整備を実施。平成14年1月末までに、202市町村213箇所の登録が行われており、各地の小学校等で地域の特色を活かした様々な取り組みが展開されている。

子どもの水辺サポートセンターの設置

7月2日に、子どもの水辺サポートセンターを開設。

環境学習の中核施設として、子どもの水辺の登録事務を行うとともに、各種情報の発信、ライフジャケットなど資機材の提供、人材バンクの整備、各種活動のコーディネート、川の指導者養成講座の開催などを実施。

3. 環境教育・市民連携対応の窓口の設置、環境教育への支援について

今年度より、総合的な学習の時間（年間100時間程度）や完全学校週5日制が導入されているが、河川に対しては環境学習の対象や自然体験活動の対象としての要望が多く聞かれている。

「川で学ぼう」、「川であそぼう」ホームページの開設

学校の先生、市民団体等が河川で総合学習、自然体験活動を行う際に参考となる「川で学ぼう」ホームページを開設（<http://www.kawamanabi.river.go.jp>）。総合学習に対応した川に関する様々な情報を発信（1年で約9万ヒット）

また、子ども向けの「川であそぼう」ホームページを開設、自然体験活動事例80種類を記載し、子どもたちの川あそび、自由研究等を支援（<http://www.kawaasobi.jp>）

さらに、学校の先生個人を対象としたメールマガジンも発行、1,000人以上が登録している。

「川の学習素材」検索サイトの構築

全国にある国土交通省の直轄事務所の窓口を河川名、地域名等から検索できるほか、各事務所が有するパンフレット、ビデオ、資料館から、出前講座まで、環境学習を支援する様々な情報を検索できるシステムを構築。情報件数は1万件を超えている。（<http://www.kawamanabi.river.go.jp>「川で学ぼう」HP内）

河川整備基金の制度拡充（河川環境管理財団）

平成14年度から河川整備基金において、小中高校の「総合的な学習の時間」における河川を題材とした活動に対する小中高校への助成を新設。詳細は、河川環境管理財団ホームページ（<http://www.kasen.or.jp>）（平成14年度分の募集は終了、319校が採択。）

川の学習を支援するTV番組の開始（4月～NHK教育テレビ）

NHK教育テレビにおいて、小学校の中～高学年における「総合的な学習の時間」において、川を題材とした学習の手助けとなる番組「『川』～川が教室～」が放映開始。

年間20本の番組が放映予定（隔週水曜10:45～金曜11:00～（再放送）15分間）

川の環境学習セミナーの開催

学校の先生方を対象としたセミナーを開催、昨年度は、日本教育新聞社主催で「川の学習実践先進校全国大会」を東京ビッグサイトで開催、約5,300人の学校関係者が来場、本年は、8月に幕張メッセで「川を活かした環境学習・体験学習全国事例研修会」を開催。

「世界子ども水フォーラム」の開催

平成15年3月に開催の「第3回世界水フォーラム」の開催に合わせ、世界の水問題に対して、21世紀の主役である子どもたち自身が発言し、意思決定に参画する「世界子ども水フォーラム」を開催。

国際会議は、ユニセフと共催、また、これの準備として地域交流プログラムを実施、全国から200以上の団体が参加。（<http://www.worldwaterforum.org/jp>）

4．川で活動する市民団体との連携について

市民団体と行政が連携した河川環境を活かした自然体験活動や河川管理の推進に向けて、拠点となる市民連携サポートセンターを試行的に設置。また、「川に学ぶ体験活動協議会」等と連携して川の指導者育成などを行っている。

川に学ぶ体験活動協議会（RAC）の活動の支援

全国各地で川をフィールドに様々な活動を行っている市民団体が中心となって「川の指導者」の育成、「川の指導者」の活動への支援、川に関わる活動に取り組む機関、団体等の交流・支援を行うことを目的として「川に学ぶ体験活動協議会」が設立（<http://www.rac.gr.jp>）。主な活動内容は、

- 川の指導者の認定制度の運営
- 川の指導者の育成講座の開催
- 川の指導者の活動支援

川に関わる活動団体の支援及びネットワークの構築

平成13年には、川に学ぶ体験活動を普及する「一日普及講座」と指導者の育成を行う「川の体験活動指導者育成講座」が全国各地で開催されている（延べ1,000人以上が受講）。また、全国的な交流として10月6日～7日に岡山において、「川に学ぶ体験活動発表交流会」が開催（約300名が参加）されたところ。今年度は北九州で10/12～14で開催。

市民連携サポートセンターの設置

現地レベルで各地の市民団体の活動を支援する「市民連携サポートセンター」を試行的に設置、行政と各市民団体との橋渡しを行う中間的な存在として、各種活動のコーディネートや各地の人材バンクなどを整備。

5．安全利用に対する取組について

「危険が内在する河川の自然性を踏まえた河川利用及び安全確保のあり方に関する研究会」答申を踏まえ、全国13河川をモデル河川に指定し、河川的安全利用に向けた様々な取組を実施（http://www.mlit.go.jp/river/press/200107_12/anzen/index.html）。

- インターネット、i-modeによる河川情報の提供等河川利用者を対象とした情報提供の充実
- 市民団体と連携し川の指導者の育成を図るなど学校教育等における安全意識の啓発
- 水難事故防止対策協議会の設立など流域における関係機関の連携の充実
- 関係機関との連絡体制の整備等緊急時を想定した体制等の構築

～ 水辺に子どものにぎわいを! ～

子どもの水辺 サポートセンター



子どもの水辺再発見プロジェクトをサポートします!!

子どもの水辺サポートセンター

「子どもの水辺サポートセンター」とは

「子どもの水辺サポートセンター」は、子どもたちの自然離れが進む中、水辺を環境学習や体験学習の場として活用していただき、水辺に子どもの賑わいを復活するために設立されました。

「子どもの水辺サポートセンター」は、文部科学省・国土交通省・環境省が連携して進める「子どもの水辺」再発見プロジェクトの推進及び水辺で活動される地域の方々や先生など教育関係者の方々等を応援いたします。

「子どもの水辺サポートセンター」の主な業務

● 「子どもの水辺」再発見プロジェクト 関係業務

- ・「子どもの水辺」の登録受付業務
- ・「子どもの水辺」活動支援業務（資機材の提供、人材のコーディネート等）
- ・全国各地の「子どもの水辺」に関する情報等の収集と提供
- ・子どもの水辺の活動関係団体の紹介、相互交流
- ・「子どもの水辺連絡会」・「子どもの水辺推進会議」との情報交換

● 川に必要な情報の提供や資材の貸出し業務など

- ・「川に学ぶ体験活動協議会」認定の「川の指導者」などの人材情報の提供等
- ・サロンの使用、資機材の貸し出し、教材・資料などの閲覧
- ・川での安全の手引き、教材等に関連情報の集積、開発、提供
- ・ホームページ、ニュースレター、情報誌の発刊などによる情報提供と意見交換
- ・川を活かした環境教育に関する調査研究

● 講習会の開催など

- ・講演会・全国交流会などの開催
- ・子どもの安全講座の開催（川での安全な活動の学習）
- ・プロジェクトWETなど各種講座の開催
- ・海外を含む「川をテーマとしたWeb交流」プログラムの運用
- ・世界子ども水フォーラム応援（2003年3月まで）

「子どもの水辺サポートセンター」で利用できる物

主な貸し出し用資機材（6月1日現在）

- ・ライフジャケット・ヘルメット〈大人用30着・子供用40着〉
- ・水中マイク（川の音を録音）〈10個〉
- ・バッジ製作機（カンバッジの製作）〈3台〉



水中マイクによる川の音の録音
ホームページで公開中



主な閲覧用資料

- ・環境教育関係図書
- ・川をテーマとした環境教育・体験活動等に関する資料（河川整備基金成果）
- ・川に関する副読本・ビデオ

「子どもの水辺」の登録について

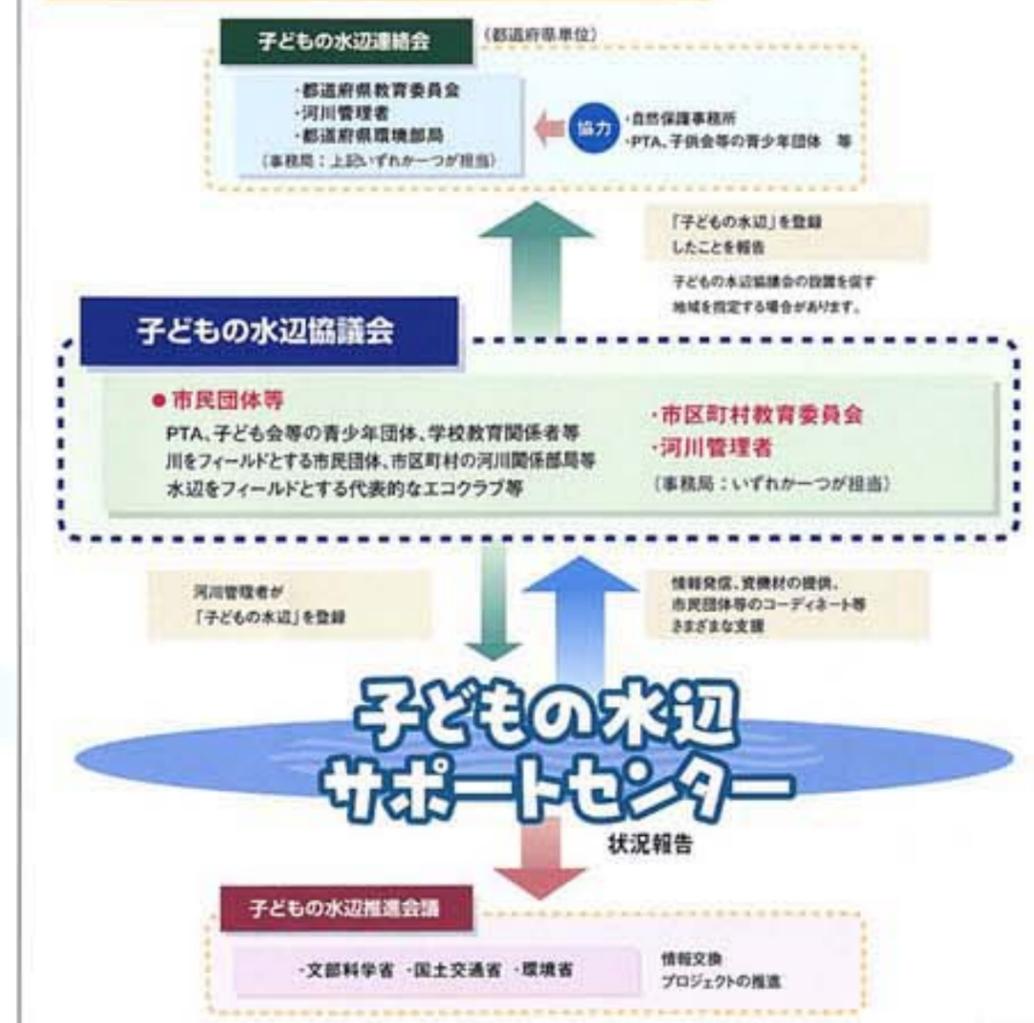
地域の子どもたちを対象として河川等の水辺を活用した体験学習や環境学習等の活動を行っている方々、あるいは、これから行おうとする方々は河川管理者や市町村の教育委員会などと協力して「子どもの水辺協議会」を設置し、活動する場にふさわしいフィールドを「子どもの水辺」として選定して「子どもの水辺サポートセンター」に登録して下さい。

「子どもの水辺」として登録すると、「子どもの水辺サポートセンター」から情報の提供、資機材の貸し出し、サロンの利用等の支援を受けることができます。

なお、登録は簡単な様式（ホームページからダウンロードできます。）と地図・写真を送付するだけで、登録料は一切かかりません。

詳しくは「子どもの水辺サポートセンター」にお問い合わせください。

「子どもの水辺」再発見プロジェクトの実施体制



開館時間・場所

平日:10:00~17:00(土曜・日曜・祝日・年末年始:休館)

子どもの水辺サポートセンター

〒104-0042 東京都中央区入船1-9-12 財団法人河川環境管理財団 2階

営団地下鉄日比谷線八丁堀駅(A2出口)徒歩5分

Tel:03-3297-2608、Fax:03-3297-2677

URL : <http://www.mizube-support-center.org>

E-mail : msc@mizube-support-center.org

〈アクセスマップ〉



東京都中央区入船1-9-12 財団法人河川環境管理財団 2階
(営団地下鉄日比谷線八丁堀駅(A2出口)徒歩5分)

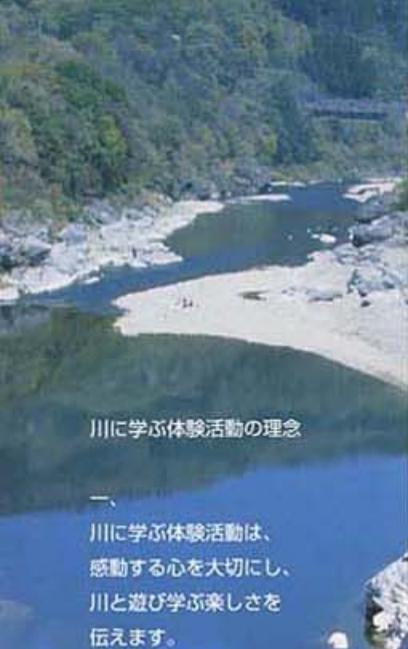


川で遊ぼう!
川に学ぼう!



みんなで増やそう川のファン
RAC

川に学ぶ体験活動協議会

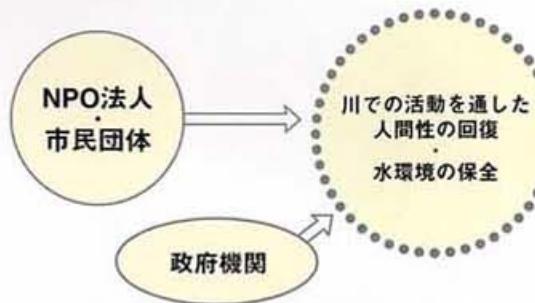


川に学ぶ体験活動の理念

- 川に学ぶ体験活動は、感動する心を大切に、川と遊び学ぶ楽しさを伝えます。
- 川に学ぶ体験活動は、川への理解を深め、川を大切にすることを育てます。
- 川に学ぶ体験活動は、ゆたかな人間性、心のかよった人と人のつながりを創ります。
- 川に学ぶ体験活動は、人と川が共存する文化・社会を創造します。
- 川に学ぶ体験活動は、川の力、活動にともなう危険性を理解し、安全へ意識を高めます。

RACってどんな団体？

全国各地の川で活動する、NPO法人や市民団体で構成される協議会です。川で活動することを通して人間性の回復や水環境の保全についての認識を広げることが目的としています。



RACってどんな活動をしてるの？

川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開します。特に、人を川にいざなうための「基礎講座」の実施や、安全に楽しく体験活動を引率する「指導者養成」などの教育活動に力を入れていきます。



[会員団体への支援]

- 保険制度
万が一の事態に備え、体験活動を進める団体や指導者を守る保険の整備を進めています。
- 情報・器材などの提供
川に関する様々なノウハウの提供や講師の派遣・器材の貸し出し等必要に応じて活動を支援します。

[ネットワーク]

各団体の活動を積極的に紹介し、団体間の交流や情報交換の機会を広げます。

[研究調査]

体験活動に適切な水質等の調査や、環境読本・教材の開発などを進めています。

River Activities Council

[普及啓発活動]

川に親しむための基礎講座を開催します

- 専門知識を持った人が中心になり、楽しくわかりやすく実施します。
- 昔ながらの川遊びからリバースポーツまで、実際に野外での体験活動も行います。
- 指導者は川の危険を熟知しているので、安全・安心です。

POINT

- RACの会員団体は、川に関する基礎知識や、講座開催のノウハウを共有しています。
- ※初級指導者養成講座の1~4の科目が履修できるプログラムになっています。

川に親しむための基礎講座

川のサブリーダー(初級指導者)養成講座



※終了書はグリーナーです。

「川に学ぶ」社会の実現に向けて川の魅力をアピールしていきます

川に親しむ活動に関係する各種機関に、その重要性を伝え、様々な連携を検討・提案していきます。

[指導者養成・認定]

川で楽しく安全に遊ぶための指導者を養成します

- 自然の中で遊ぶには多少の危険はつきもの。川を知り、安全で楽しい活動をリードする川の指導者を養成します。
- 指導者による的確なリードにより、川に学ぶ体験活動を普及させるため、川に学ぶ指導者を養成することが目的です。

POINT

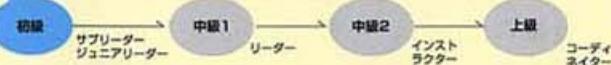
今までの調査研究から得られた知見やそれをまとめた資料を集約・活用し、指導者養成に活かします。

■初級指導者養成講座の科目と履修時間数

必須科目	必要履修時間	講義	実習	合計
① 川に学ぶ体験活動の理念		①	②	③
② 川という自然の理解		①	②	③
③ 川と人・社会・文化の関わり		①	②	③
④ 安全対策について		①	③	④
⑤ 川に学ぶ体験活動の基礎技術		①	②	③
⑥ 対象となる参加者のことを知る		①	①	②
⑦ 川に学ぶ体験活動の指導法		①	③	④
⑧ プログラム作りの基礎知識		①	②	③
合計		⑧	⑩	⑱

■川の指導者ランク

年齢や経験、履修科目によって、引率できる人数や活動内容がアップします。



NPO法人
水環境北海道
「河川林を
復活させるための
雪中での植林」



馬場村
「稚粘の放流体験」



NPO法人
ひたかみ水の里
「カヌーイカダ体験」



旭川圏域
ネットワーク
「上下流の子供達
の交流学習」



緑川の清流を
取り戻す
茨城連合会
「有明海カヌー横断」



NPO法人
幅広いNPO28サロン
「初級講座
オリエンテーション」

CONeとの連携

自然体験活動における指導者育成のスタンダード「自然体験活動推進協議会 (CONe)」と連携したカリキュラムを採用。RACが認定する川の指導者は、CONeの制度に対応し、登録・公開されます。

RACは会員(個人・団体)を募集しています。(会費/正会員 10,000円、賛助会員 5,000円)

川で活動をしている皆さん、これから川で活動しようとしている皆さん。子ども達をはじめ、多くの人々に川のファンになってもらうため、RACは川の指導者を育てたり、川で活動する人たちを守る保険をつくりたりして、皆さんの活動のお手伝いをしていきます。是非、このRACに参加し、そして活用して下さい。

講座の受講など、いつでも気軽にお問い合わせ下さい。

各地で開催される講座の案内や参加のお申し込み、出張講座の開催依頼やご相談、RACへの入会問い合わせなど、どんなことでもお気軽に事務局までご連絡下さい。

「川に学ぶ体験活動協議会」事務局
(財)河川環境管理財団 内

〒104-0042
東京都中央区入船1-9-12
TEL: 03-3297-2644
FAX: 03-3297-2677
<http://www.rac.gr.jp>

RAC 川に学ぶ体験活動協議会 構成団体 (平成14年7月現在)

NPO法人 水環境北海道
NPO法人 帯広NPO28サロン
NPO法人 しらべつリバーネット
「バイエルンの風」カヌー学校
藤川・沙流川交流会
バイオブロック工芸普及連絡協議会
エコスクール北海道
島松小学校 柏木川プロジェクト
カラカイトンボを守る会
NPO法人 潮騒の田おたる
遠軽町河川愛護少年団(川の学校)
湧別川流域会議
川や海を守り伝統を伝える会
山のないうちの輝き
クマツシふるさと清流の会
川に学ぶ体験活動 東北北海道協議会
NPO法人 ひたかみ水の里
みちのく若手かつり
EMJがしネットワーク 東北
河原川・川の達人の会
阿比留川サミット実行委員会
若木山自然学校
NPO法人 多摩川センター
鏡見川流域ネットワーク

日本ロイヤル・ライフ・セイビング協会
NPO法人 空堀川に清流を取り戻す会
首都圏6千歳の川の未来を創ろう会
江戸川・水フェスティバルいちかわ実行委員会
荒川流域ネットワーク
新川改修促進用成同盟会水質モニター
フレスト&ウォーター
新河岸川水系水環境連絡会
東豊田緑湧会
karute
カントリーレイクシステムズ
NPO法人 フィールズ
イワタニリゾート株式会社アウトドア事業部
北区・みずとみどりの夢倶楽部
国際海洋自然観察員協会(PACI)
野外教育事業用 ワンパク大学
NPO法人 広域防災水圏救助捜索支援機構
財団法人ハーモニセンター
社団法人 日本ネイチャーゲーム協会
NPO法人 国府自然学校
全国Eボート連盟協会
NPO法人 地域交流センター
NPO法人 小貝川プロジェクト21
しずおか流域ネットワーク

馬淵村役場
NPO法人 長良川環境レンジャー協会
NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター
NPO法人 メタセコイアの森の仲間たち
堀川とまちづくりを考える会
狩野川倶楽部
水野地域まちづくり協議会
千代田環境保全推進協議会
春日井市立小野小学校
にこにこクラブ
「アウトドア遊友」(岐阜市青少年活動サークル)
きれいな川を守る会
五泉トンゴを守る会
近畿水の塾
自然学校 はじっこクラブ
「水辺に遊ぶ活動」推進事業実行委員会
日野川流域交流会
奥越土木研究会
NPO法人 グリーンウェル
流域調整室
松原自然探検会
(有)ピュクスマイル
ふるさと部-つづくり協議会
NPO法人 大阪-水がいていようBOB

堀川流域ネットワーク
エコロジー研究会ひろしま
NPO法人 まちのよそおいネットワーク
フィールドパーティーカヌースクール
江川の川カヌー公園さくぞ
「やまぐちの川」環境人養成塾 設立準備会
高知 水・川問題を考える会
高知県環境教育研究会
東予環境グループ
きと緑の自然工房
NPO法人 新訂川を守る会
緑川の清流を取り戻す流域連絡会
川勝 北九州
大牟田はやめにこにこ会
NPO法人 ウエルネス河川愛護協会
やんばるネイチャースクール
リバーフェスタのべか

■協力団体
財団法人 河川環境管理財団
財団法人 河川情報センター
社団法人 日本河川協会
財団法人 リバーフロント整備センター
(順不同)

RAC 川に学ぶ体験活動協議会 入会申込書

●川に学ぶ体験活動協議会に入会申し込みいたします。

年 月 日

団体名

代表者氏名

所在地 〒

電話

FAX

E-MAIL

ホームページアドレス

担当者氏名

連絡先 〒

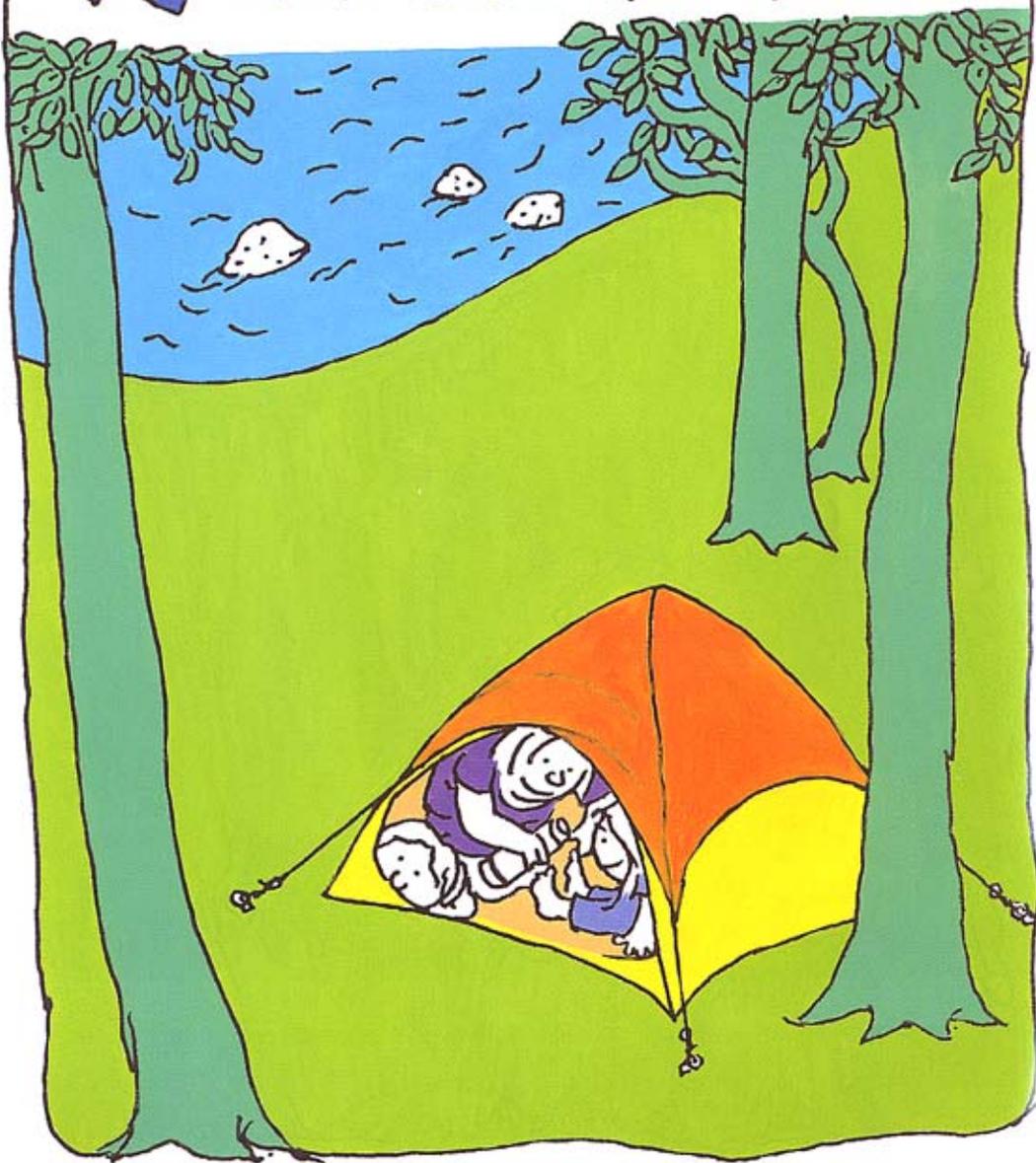
電話

FAX

E-MAIL

水辺の安全ハンドブック

川を知る。川を楽しむ



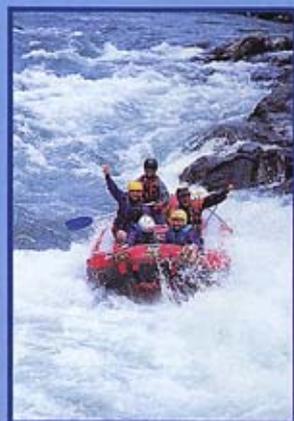
●出かける前の準備と心構え

P4 天候次第で中止もあり得る

気象情報の集め方
地図の見方の学習

P6 装備は楽しさの決め手となる

ロープワークを知っておこう
ファーストエイドキットは必携品



●出かけてからの心構え

P8-11 キャンピング

キャンプサイトの選び方
川辺でのキャンプのマナー

P12 リバー・ラフティング

フィールドの見方をマスターしよう
ライフジャケットは必需品

P14 フィッシング

水中歩行のノウハウ
水深30cm以上は渡渉せず



●玄倉川での事故等を契機に
設立された研究会からの提言

P16 「恐さを知って川と親しむために」

アウトドアでの楽しみはなんといってもキャンプの楽しさに集約されるでしょう。日常から解放され、家族ともども自然の中でのんびりと過ごす心地よいひときは、何事にもかえ難いものがあります。とりわけ人は水辺には引き寄せられる動物のようで、川のせせらぎを聞きながらうたた寝をしていると、遠く太古の時代へスリップする思い深いものがあります。

岸辺の深い緑、広がる小石の川原、中州には小さな流れが小石を縫うように広がり、深い淵では流れが渦巻きとなり、その下ではなにやら小魚が潜んでいる気配。このすばらしい景観は誰の手も借りずに、自然がじっくり時間をかけて育んできたものにほかなりません。その力を借りて人は心地よい感触に浸るわけで、この至福の瞬間だけは誰にも奪われたくないと考えます。

しかし、ひとたび水難事故に遭遇すると、こうした楽しさはすべて奪われてしまいます。では水辺の遊びで起こる事故は、避けられないものなのか。そうではありません。事前に事故に至らぬよう細心の注意意識を持っていれば事故回避は可能といえます。

川の流れや天候を観察し、自然で起こるさまざまなことに想像力を働かせて、謙虚に自然と接する態度がなにより必要になります。しかし、ひとたび何かが起こったときは自己責任での対処が厳しく求められます。そして事態の判断能力も問われ、これが生死の分かれ目になることが少なくありません。

このあたりを学習し、鍛え、いつも意識の中に置いておくことが、事故回避につながることになるわけです。

このハンドブックには楽しい水辺での遊びをより安全で楽しいものにするためのノウハウが詰め込まれています。出かける前に熟読するだけでなく、キャンプサイトに持ち込み、楽しみながら意識を高めていただければ幸いです。

笠雲は雨の予兆



山の頂上を覆う笠のような雲は写真に格好の材料だけど、これは上空に湿った気流がある証拠。湿った気流が独立して峰の地肌の湿度とかかかって笠雲になるわけだから、面白い形を楽しむ前に、湿った気流は天候の崩れを意味していることをさとるべきだろう。用心に越したことはない。

日中の山風は雨になる

天気予報だけじゃなく自然が発する悪天のサインを見逃さないように。たとえば、日中は上昇気流により谷から山へ吹き上がる谷風が普通なのに、これが山から吹き下る風だとしたら、やがて雨になることは確実に考えたほうがいい。



遠くの音が聞こえると雨が近い



遠くの物音がよく聞こえたら雨が近い、とは昔の人の言い伝えだけれど、当たらずとも遠からずだ。というのも、高気圧に覆われているときは空気は乾燥して音も拡散してしまうけれど、空気が湿っていると雲がたれ込め、そこに音がよく反射して伝わってくるのではないかと。というふうには科学的には説明できるのかもしれない。確かな根拠はないけれど、参考にして悪くなさそう。

ひつじ雲が出たら天気は下り坂



うろこ雲(巻積雲)が空を覆うようだと、天気は急に悪くなるといわれますが、それより雲の塊のやや大きなひつじ型のひつじ雲も、同様に急速に変化する悪天のサインです。キャンプサイトを高い位置に変更したり、撤収にとりかかったほうが無難だ。

寒くない朝は天気の下り坂

朝、テントから抜け出してくると、夏でも外気は冷え込んでいたり、あるいはテントに夜露が降りていたりするとその日は晴れになる。だが逆に妙に暖かいぞという朝は、天気は下り坂になる。寒暖の差がなく空気中に水蒸気が多いため雨模様になるわけだ。



出かける前の準備と心構え

天候次第で中止も有り得る

気象情報の集め方



普段はテレビ、ラジオ、電話サービスなどから気象情報を得ている。これでは十分機能するけれど、さらには携帯iモードやパソコンによるインターネットでの情報も活用したい。気

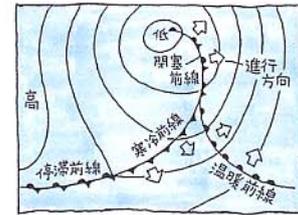
象衛星画像など充実している「日本気象協会」のほか民間機関のサイトもあるから覗いてみよう。



キャンプを計画し日程が決まったら、まず気象情報を集め期間中の天候状況を把握しよう。天気図の読み方などを学習し、天候の変化を予測できるように

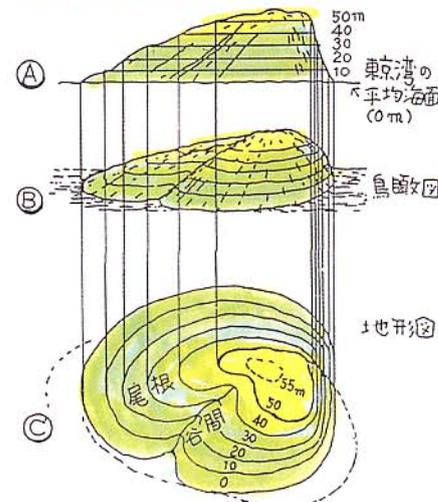
★前線の天気記号	★風力 風力1 風力6 風力12
温暖前線	風向記号
寒冷前線	★風向 矢印の方向に吹く。これは北の風。風力3くもり
停滞前線	

○快晴 ○晴 ○曇 ●雨 ●雷



しておきたい。悪天候が予測できたら中止する勇気を持つ。また現場の天候が怪しくなったら撤退する勇気を持つ。これが鉄則だ。

地図の見方も学んでおこう



低気圧が発生すると天候が崩れることを知っていれば天気図(上图)でおおよその予測ができるもの。それと同様に、出かける先の2万5000分の1地図の読み方を知っていると、現地をより深く理解できるようになり、とっさの判断のときに大いに役に立つものだ。10mごとに引かれた等高



線で山や谷などの鳥瞰図を想像できるようにしておくこと。コンパスを使って現在地が確認できたり、進む方向を決めたりできるようにしておくこと。記号や表記で崖、ガレ場、砂礫地、堰、滝、ダム、荒地、しの地、などの存在を読みとれるようにしておくこと。これくらいは自分のものにしよう。2万5000分の1地図は大型書店等で購入できる。

山間部では雨が降ると鉄砲水

日本の深流は急峻な谷ゆえ、ひとたび雨が降ると、川が一気に増水し鉄砲水となるケースが少なくない。雨が降ったらすぐに川から離れる、が鉄則だ。



砂防ダム真上は危険

激しい土砂の流出をくい止めるために造られるのが砂防ダム。それだけに土砂堆積は進み河床勾配が緩くなり川原は平坦でキャンプサイトに相好に見えてくる。しかしここが一番危険な場所なのだ。



ダムは適時放水がある

発電用、農業用などのためにある取水ダムは、安定的な取水量を越えようと放水しなければならぬ仕組みにある。放水されれば川は増水するわけで危険だ。そのあたりを十分に知っておくことだ。



大木の真下にテントは張らない

ほかに何もない大木の真下は雷が落ちたときに飛び火するのでここも避けること。樹木の頂点から45°の角度の範囲内で真下から離れたところが影響を受けにくい場所。一番は林の中だけだ。



ダムの警報装置について

まず地図などで上流にダムがあるかを確認しよう。ダムは洪水時に限らず、人為的操作によって放流が行われることがある。このような放流があると、下流の水位は急激に増える恐れがある。放流時に安全を確保するために、下流に放流を知らせるサイレン等が設備され、事前にゲート操作の警告が発せられる決まりになっている。注意して川のそばを観察すると、必ずそういう装置が見られるはずだ。存在を確認しておこう。サイレンは休止を挟んで約1分ずつ鳴らされ、かなりの広範囲に届く大音量になっている。



川が時間とともにどんどん増水してかなり危険な状態になる直前には、必ずダムの放流警報で知らせたり、管理の作業員やら最寄りの警察官やらが、安全と待避の呼びかけをすることが普通だ。これにはいやでも素直に従うことだ。水の気配がない場所でテントを張っていても、あっという間に水没する可能性があることをお忘れなく。



退避の呼びかけには素直に従う



キャンピング

キャンプサイトの選び方

植生の痕跡のない場所は増水する

川原を見るとテントを張りたくなりますが、木々草木の植生がまったく見られない場所は水が出るといききに増水する場所。こういう場所にはテントを絶対に張らないこと。



日常を離れて自然の中にやってきた。さあテントを張ってすぐに行動だ。といきた

いところをグッと抑えてまず周囲を観察しよう。川の流れや岸の様子、樹木の植生からキャンプサイトを決めたいものだ。テントが浸水したり風で飛ばされてしまつては最悪だから。ま、基本的には指定されたキャンプ場にテントを設置するのがなにより安全で便利ということを心得ておこう。



川原や中州は川そのものと思え

川原や中州で多少草木が生えていても、そこは増水したことがない場所とは限らない。増水する天候でなくても川原や中州には絶対にテントを張らないを鉄則にしよう。特に中州はいざというとき逃げ道がない。これをしかと肝に銘じてキャンプする場所を選ぼう。

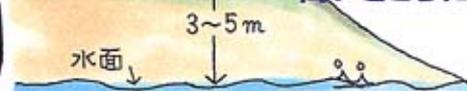


林の中の平坦な場所で

ベストのキャンプサイトは林の中の平坦な場所だ。川の増水や雷の心配もなく適度に木陰もでき快適な場所だ。それだけに競争率も高いから瞬時の判断と行動が必要になってくるけど。



テントは水面からなるべく高いところに



場所にもよるけれど川の急激な増水は平常時の水面から3~5mくらいまで増えるのがよくあるケースだといわれる。だから少なくともこれより高い所にテントを張りたいたいものだ。周囲の植生で判断できないときはこのやり方を採用しよう。



できるだけ洗剤を使わない

キャンプの調理道具や食器はいつも以上にきれいに洗いたいところだけど、環境への影響を考えると洗い方にも注意が必要。特に油分は流さないよう紙でふきとること。洗剤もできるだけ使いたくない。どうしてもというのなら、アウトドアショップなどで売っている環境にやさしい液体石けんを使おう。



川辺でのキャンプのマナー



ゴミは分別して持ち帰る

ゴミは出さないに越したことはないけれど、でもどうしても出てきてしまうもの。キャンプサイトでは、最低でも燃えるゴミ、燃えないゴミを分別してキープしておきたい。しかしそれを現地のゴミ箱につこんで帰る、なんてのは言語道断だ。必ず自分の住まいまで持ち帰って処理するのがキャンパーのマナーなのだ。



水 辺のキャンプとはいえ、そのほとんどが車利用のオートキャンプといえよう。電車での手荷物と違ってクルマには日常の殆どを積み込んでゆけるわけだから、野放図に持ち込んでしまいがちだ。これが周囲に迷惑をもたらすことになったりする。あくまでも自然で遊ばせてもらうことを念頭に、公共の場所でもある自然を清潔に使う努力を怠らないように。

ネイチャーウォッチングの楽しさを知ろう

ただただキャンプは寝泊まりして食事して帰るだけよ、というのではとても寂しいことだ。野鳥や森の動物の観察、バードソングの録音採集、自然で観察したものをフィールドノートへ克明に記録する、森に落ちていた鳥の羽だけをコレクションしてみる、朝日や夕日に燃える川の表情をじっくりカメラに納める、といった楽しみをいろいろ試してみたいものだ。



ただただキャンプは寝泊まりして食事して帰るだけよ、というのではとても寂しいことだ。野鳥や森の動物の観察、バードソングの録音採集、自然で観察したものをフィールドノートへ克明に記録する、森に落ちていた鳥の羽だけをコレクションしてみる、朝日や夕日に燃える川の表情をじっくりカメラに納める、といった楽しみをいろいろ試してみたいものだ。



水遊びの注意事項

川原に草のない場所はよく水高があがる所だ。砂防ダムのある所は出水時に土砂の流れが多くなる。取水ダムのサイレンは、現在地ではなく上流の降雨量で発せられる。川原や中州は少しの水で水没し、川底の石はとても動きやすい。日本の山間部の川は少しの雨でも急激に水位が上昇することがある。雨が降ったら撤収が原則だ。また、着衣のまま水に入ると泳ぐことは難しいということも覚えておこう。

カマドの作り方と火の付け方

アウトドア・クッキングはバーナーで作ると手早いけど、やはりカマドでやると味わいが出てくる。カマドの口は風下に置くのが基本で、焚き付けは松や杉の枯葉がよく燃える。乾かした牛乳の紙パックも抜群で、これらを下に盛り薪を乗せて火をつけるだけでOKだ。



水難救助隊NPOが設立された

2000年5月に発足した「Jp-SART(広域防災水難救助捜索支援機構)」は、NPO(特定非営利活動法人)として河川での安全啓蒙活動や水難救助協力を行う全国組織だ。東京都新宿区に本部が設置され、現在は北海道(千歳川)、関東(荒川、利根川)、中部(富士川、長良川)、関西(保津川、瀬田川、北山川)、九州(球磨川)の9か所を拠点に活動を行っている。発足後まもない現在は、水難事故救助活動の

ほか、川で安全に遊ぶためのワークショップの開催、河川環境フォーラムへの参加などを通じて、団体の存在を積極的にアピールしている。また、国土交通省の関東地方整備局と提携し、職員や一般市民に対して洪水災害時の対応についての講習を共同企画するなど、行政と協力しながら安全啓蒙活動も進めている。「Jp-SART」の詳細な活動内容に関してはホームページ(<http://www.jp-sart.or.jp/>)で。

iモードで河川情報を知ろう

国土交通省は6月1日から、川の水位や上流の雨の量などの情報を、インターネットや携帯iモードで提供することになった。これは全国26か所に設置されたレーダーによって雨量を計測して、最小で5キロ四方のエリアごとに雨量が表示されるのだ。また、全国1800か所にある雨量計や、1000か所にある水位計の計測結果も提供される。この結果10分単位で更新された情報が、手元のパソコンや携帯電話で把握できるわけだ。アドレスは(<http://www.river.go.jp/>)。iモードは(<http://i.river.go.jp/>)。



大雨が降ると清流もたちまち濁流と化す。



ライフジャケットは必需品

ラフティングに格好のウエアはウエットスーツかドライスーツ。ツアーにはレンタルも用意されている。これにパドルリングシューズを履く。ライフジャケットにカヌー用ヘルメットは必須で、これなしではやってはいけないし、第一やらせてもらえない。あとはラダーマンの「ホールドオン(つかまれ!)」や「ゲットダウン(伏せろ!)」などの命令に従いつつ、ただひたすらパドルを漕ぎまくる。最高の川との遊びが味わえる瞬間だ。



レスキューロープのつかみ方

最近では目的の場所に届きやすい構造のスローバッグに、約15mくらいのロープを収納したものが市販されていてとても機能的だ。普通のナイロンロープを含めて、これらをレスキューロープと呼ぶ。スローバッグをつ

かんだらうつぶせに引っ張られてはいけない。仰向けで空を見る格好が抵抗を少なくする。できればバッグを股に挟み、腕力の負担を軽減してやるといい。ベルトにロープを通しバッグをくぐらせて連結する、なんて余裕があるときにベスト。



リバー・ラフティング

川の流れと表情はいつも変わる

川幅が急に狭くなると緩やかな流れは暴れ出す。日本の峡谷は複雑な水の動きと渦が多く瀬と瀬の間隔も狭く落差も大きい。障害物があれば蛇行流、屈曲流などの流れ方も多様で面白い。



流れが岸にぶつかる場所は深くて流れが速い

川の流れが表面で速く、底で遅いところで障害物にぶつされると、上部はさらに圧力を増大させる。この圧力の違いから、流れは水面から底へ引きずり込むようにより速くなっていることを知っておこう。



大型のゴムボートに振り分けに乗って川を下るリバー・ラフティングは、スリリングなアクティビティだ。共同作業で仲間意識も芽生えてくる。自分勝手にやらせインストラクターのいるツアーに参加するのがなによりだ。基本的な知識、技術、安全への備えなどしっかり学ぼう。

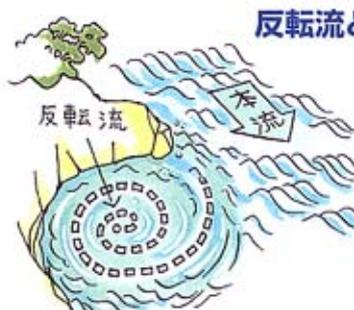


流されたときは足を川下に



仲間と離ればなれに流されても慌てず、流れに逆らわずに身を任せてしまうこと。仰向けになって足を下流に向けてのがベストな流れ方。障害物があれば足で処理できるからだ。安全な場所にたどり着くまで決して足を河床に着けないこと。見えない石や障害物に足をとられてしまうことがあるからだ。

反転流とはこんな場所



川に出っぱった岸の陰には反転流ができる。流れは逆流し渦となって淀みを作っている。流されたときはここに泳ぎ着くと、流されることなく救助を待てるのだ。

フィールドの見た方をマスター

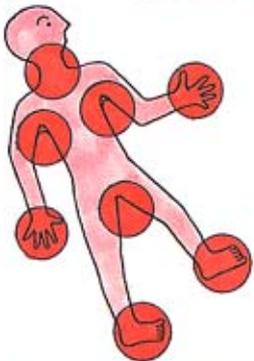
川には様々な表情がある。瀬、淵、中之島、崖、壁岩、堤防。砕け波、返し波、崩れ波、噴き砕け波。性格を我がものに。

川に学ぶ体験活動協議会

「川に学ぶ体験活動協議会」とは、人々が楽しく安全に川と親しむために、全国各地でさまざまな活動をしているNPOが中心となって設立された団体。主に正しい知識と豊かな経験を持つ「川の指導者」育成などを目的として活動している。

身体が冷えたらここを温める

落水して長時間水の中にいれば身体は冷えてくる。助けられても身体が冷えては不調になるだけだ。落水しただけで精神的なショックを受け気分が悪くなるのだからなおさら。人間は身体が冷える時は末端から冷えるから、逆に手のような末端の部位をまずはしっかり温めてやることだ。ただし本当に冷えきってしまったら、身体全体をゆっくり温めよう。



落水したらどうするか

落水してもあわててはけない。まずは近くにいる仲間がパドルで引き寄せられることになる。離れてしまえば、ラダーマン(舵取り案内人)必携の救助用スローバッグが飛んできてくれることになるから、それにつかまればいいのだ。なによりあわてないこと。



川の構造を知って リスク回避

平瀬、早瀬、深い淵、流れのぶつかり、大滝・小滝の連続。崖、水制、崩れた岸、ゴロタ石の広い川原、中州、砂防ダム、堰、ダム。などなど、一本の川にはさまざまな表情がありさまざまな危険がその中には潜んでいる。危険を察知するのは時間のかかることから、土地の人の話にも耳を傾け学習しよう。



上流へ45度の角度で渡る

渡渉するときは対岸の目指す場所へダイレクトに向かっても、どういわけかそこより下流に行き着いてしまった経験はないか。流れに負けてないつもりでもスリズリと少しずつ下流へ押しやられているのだ。目指す方向より45°くらい上流を目指して渡渉するとちょうど目的の場所に到達することになる。



荷物を腹に抱える

空手でスタッフを突いて渡渉するのがなにより一番渡りやすいのだが、釣りやその他のアクティビティではそうはいかない。ショルダーをたすぎがけしたりデイバックを背負ったりが普通だ。キャンプなどでは背負えない荷物を抱えて渡ることも出てくる。これが一番難しくコケる公算も高い。胸に抱えると前が見えなくて動きは鈍るし、上流45°を目指すのはまことに苦しい。このときは下流へやや圧されながら進む方式が渡りやすい。

フィッシング

水 辺のキャンプ

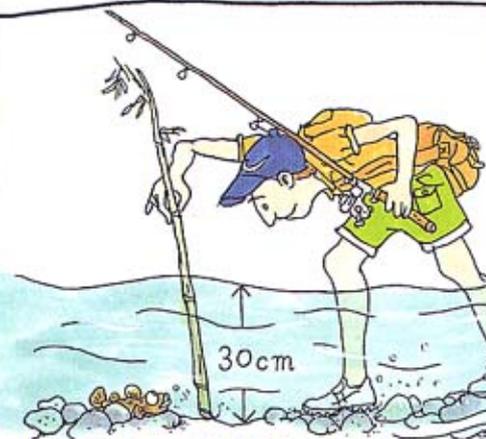
でもっとも手軽に楽し

めるアクティビティといったらフィッシングになるのではないかと。釣り人口はほかのアクティビティに比べて圧倒的に多く、近年はルアーやフライによるスポーツフィッシングが大いに幅を利かせている。河口に近い下流域ならハゼ、コイ、フナといった魚になるし、中流域ならオイカワ、ハヤ、アユとなり、上流域でニジマス、アマゴ、ヤマメ、イワナといった魚が対象魚となってくる。ルアーやフライを使った釣りでは上流域の渓流釣である。しかしここは川の源流部に近くなる。それだけ危険がいっぱいでもあるので、ほかの遊びと同様の川への認識を深めていなければならないところだ。また、場所によっては規則が存在する。川には漁業権が存在するところも多く、釣法にも制限があるところがあるので、注意したい。



水中歩行のノウハウ

流れがあると膝下くらいの水深でも足を前に出すのが難しい。しかしどうしても渡らなければならない場合は、両足は肩幅に広げ底足をしっかり踏みしめる。前進の時に足を上げずすり足で一歩一歩足場を確かめて進む。このとき大石と大石の間に足を挟んでしまわないようにしましょう。丈夫な太枝を杖がわりに前方に突きながら進むと前進する足はより安定してくる。



水深30cm以上は渡渉せず

むやみに水に入ってしまう釣りは、あまりいい釣りとはいえない。出来るだけ岸辺で勝負するのが基本だ。それでも、もう少しポイントに近づきたい、対岸に渡ったほうが狙いやすい、といったことが頻発するのも釣り。対岸へ渡渉するときは、水深30cmを越えたら渡らないことを決めておこう。ほぼ膝下あたりになる。浅くても川の流れは案外急で足を取られるのだ。

研究会からの提言

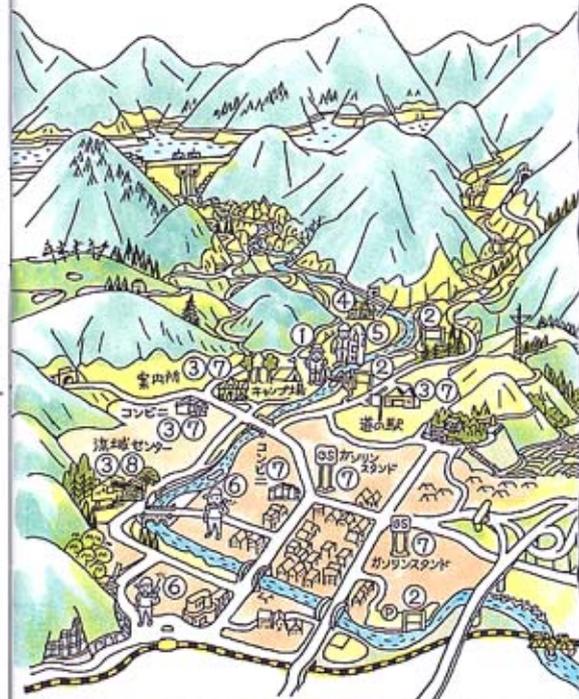
近年ことに高ま

りを見せているアウトドアへの関心は、盛り上がりこそすれ影が薄くなる様子をまったくみせていない。とりわけキャンプや釣りに代表される河川利用のアクティビティは、日本人の風土や家族構成や趣味にみあっているのか、ますますの盛り上がりである。大いに楽しむべきだと思うが、その一方で楽しみのまっただ中で水難事故に遭遇する人たちが跡を絶たない。玄倉川の痛ましい事故の記憶も新しいことと思う。

このような状況の下、国土交通省が設置した「危険が内在する河川の自然性を踏まえた河川利用及び安全確保のあり方に関する研究会」が、昨年10月に提言「恐さを知って川と親しむ」を出した。

今後、どのような取り組みが必要なのか、提言を見てみよう。

**玄倉川での事故等を契機に
設立された研究会からの提言
「恐さを知って川と親しむために」**



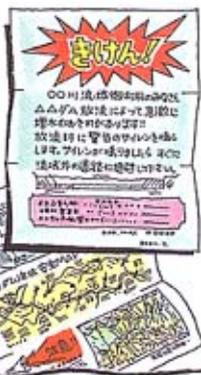
学校教育や社会教育における河川や海岸など自然の水に関する基礎知識の習得や、安全な河川利用のための講習会の実施など実体験を通した学習活動を実施する。また、ボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団などが多様な野外活動の機会を利用して、河川利用における安全確保について学習できるようにする。また、現地において河川利用者へ、安全面の指導をする「川のインストラクター(仮称)」を養成することも必要だ。(P13参照)



① 河川利用時の安全確保の学習

③ 河川安全利用マップ

川に入る人を対象に、その川のどこがどう危険な場所なのか、気をつけなければならないことはどんなことか、などなど細かくてわかりやすい「河川安全利用マップ(仮称)」等にまとめ、情報を周知する。



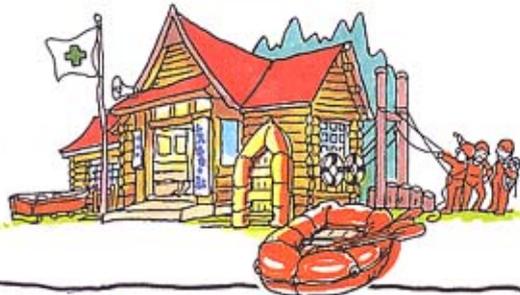
② 現地における危険情報の提供



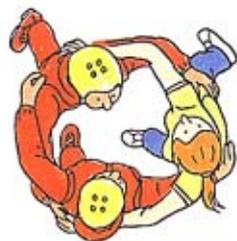
水難事故発生箇所や出水時の実績水位などの看板を設置すること。ダム放流時のサイレンの意味の周知などなど。(P9参照)

④ 救助活動拠点の整備

キャンプやその他河川利用のアクティビティが多い河川には、救助用のロープつき浮き輪など、レスキュー隊が救助活動に必要な器具を配備した拠点を整える。なお、この整備は河川を管理している国や県などの機関が協力して体制を整えている。



⑤ レスキュー隊の育成



ひとたび水難事故が起こったならば、レスキュー隊には適切な判断と迅速な行動が求められる。それは広汎な専門知識と高度な技術に裏打ちされたものでなければならず、このような能力をもつレスキュー隊の育成を図るとともに、救助活動に必要な技術の開発を行う。(P11参照)

神奈川県・丹沢・玄倉川。酒匂川水系三保ダムの丹沢湖に注ぎ込む主要な支流の一つが玄倉川だ。丹沢湖の周辺にはいくつかのオートキャンプ場が整備され、どのキャンプ場も川や湖が増水しても問題のない、水面からは高い位置の林の中に配置されている。だが1999年8月の事故はこれよりも上流の、砂防ダムの真上にある川原で起こった。そこは広く平坦で一目キャンプサイトに最適と思える川原だ。上流からの土石が砂防ダムで堆積した場所で、雨さえ降らなければ、増水さえしなければ、格好のキャンプサイトかと思われる。しかし周辺の道路わきにはキャンプするには危険であることを知らせる看板が立てられている。この看板は決してダメなどではない。砂防ダム真上の平坦で開けた川原は、一度雨が降ると危険地帯と化して



事故後、こういった新しい看板がひときわ目立つようにならなくなった。



砂防ダム直上の川原は水遊びばかりじゃなく、キャンプサイトに最適に見えてしまうからこまるのだ。

丹沢・玄倉川の水難事故に学ぶ

1999年8月、弱い熱帯低気圧が関東に大雨をもたらし玄倉川が増水し、18人が濁流に飲まれ13人が命を失った。

しまうのだ。ましてその中州となれば増水時に逃げ場はなくなる。こうした場所でのキャンプが、懸命の救助にもかかわらず13名の尊い命を奪う事故につながったのだ。

一見安全に思われるような場所であったとしても、雨が降り始めたら川原から速やかに退避する。放流警報、退避勧告には素直に従うなどなど、玄倉川事故から得られる教訓は数多い。

いま2年前のあの場所に立ってみると、どこが13人も命を飲み込んだ川なのかと思ってしまう。川原の中ほどにわずかな水の流れが走る、だっ広い川原が望みえるだけの快晴時の玄倉川。さすがに懲りてテントはひと張りもないかと思っていたら、3張りのテントが張られていた。がんじがらめの規則だらけのキャンプなんてまっぴらだけど、最低のルールを守らないでいたら、せっかくの楽しいキャンプが一転最悪の事態を迎えないとも限らない。自然の中でこそ得られる楽しみを味わいたいのなら、自然には厳しい側面があることを忘れてはならない。天候の変化を各自が心得て、二度とこのような事故が起こらないよう肝に銘じたい。



ダムは一定量の水位をこえると、必ず放流して水位を調整する。この放流を知らせてくれるサインを周知させるための看板も増えている。



広い川原、ちよろちよるの水の流れ。とても13人を死に至らしめた川とは思えないから逆に不気味になる。



林道のガードレールにそって張られた横断柵。この真下が丹沢・玄倉川水難事故現場なのである。

⑥きめ細かい情報の提供

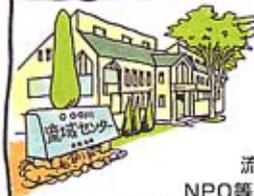
河川を管理する国や県などは、必要に応じて民間の通信事業者の協力を得て、河川利用者が気象情報、水防警報、雨量、水位などの河川に関する情報を容易に入手できるように、携帯端末等やインターネットなどを活用した情報提供システムの構築を進める。キャンプ場の

利用者がキャンプ場の気象情報等にアクセスしやすい環境を整える。(P10参照)



⑦コンビニなど情報ゲートの整備

河川安全マップといったような印刷物をいくら作ったとしても、それが訪れる人たちの目にふれてこそ機能するものだ。そこでコンビニエンスストアやガソリンスタンドを河川情報のゲートとして、活用を図る。



⑧多様な情報拠点の整備

流域における関係機関やNPO等のネットワークの拠点となる「流域センター(仮称)」を多様な情報拠点として活用し、気象情報、河川情報など様々な情報を入手できるように整備を図る。また、救助活動を行う場合の拠点としても活用できるように配慮する。





編集・発行

財団法人 河川環境管理財団

〒104-0042 東京都中央区入船1-9-12 タイヤライズビル

TEL:03-3297-2644 FAX:03-3297-2677

E-MAIL: info@kasen.or.jp URL: http://www.kasen.or.jp/

編集協力

(有) ライブ・ラリー

本文中の河川と天候に関わるホームページアドレス

国土交通省河川局 川の防災情報(ホームページ) <http://www.river.go.jp/>

(iモード) <http://i.river.go.jp/>

(財)河川情報センター(ホームページ) <http://www.river.or.jp/>

防災気象情報サービス <http://www.tenki.or.jp/>

Yahoo!天気(iモード) <http://mobile.yahoo.co.jp/>

Jp-SART(ホームページ) <http://www.jpstart.or.jp/>

国土交通省河川局 提言「恐さを知って川と親しむために」 <http://www.mlit.go.jp/river/anzen/teigen/Navigation1.html>

平成 14 年 11 月 7 日
国 土 交 通 省

連携施策についての情報交換

連携施策名 漂着ゴミ調査

1. 背景

海上保安庁では、海洋環境保全対策の一環として、海洋環境保全のための指導・啓発活動を実施しているが、海洋環境の保全のためには、一般市民、特に次世代を担う小学生などの子供たちに幼い頃から海をきれいにする気持ちを持ってもらうなど、国民一人一人のモラルに訴えかける指導・啓発活動が重要である。

海岸に大量に漂着するゴミのうち、自然には分解しないプラスチック等の石油化学製品が多くを占め、景観だけでなく海洋生物への影響など無視出来ない環境問題となっている。

2. 目的

参加者への啓蒙と海岸に漂着する実態の把握。

3. 施策の概要（対象、内容、効果）

対象： 小中学生、一般市民、マリンレジャー愛好家

内容： 海岸に漂着したゴミを回収、分類・集計する。

効果： 海岸に漂着するゴミの中で、日常生活から出るゴミの占める割合を実感し、国民一人一人のモラルに訴えかかえる指導・啓発活動を行い、もって、海岸が綺麗になる。

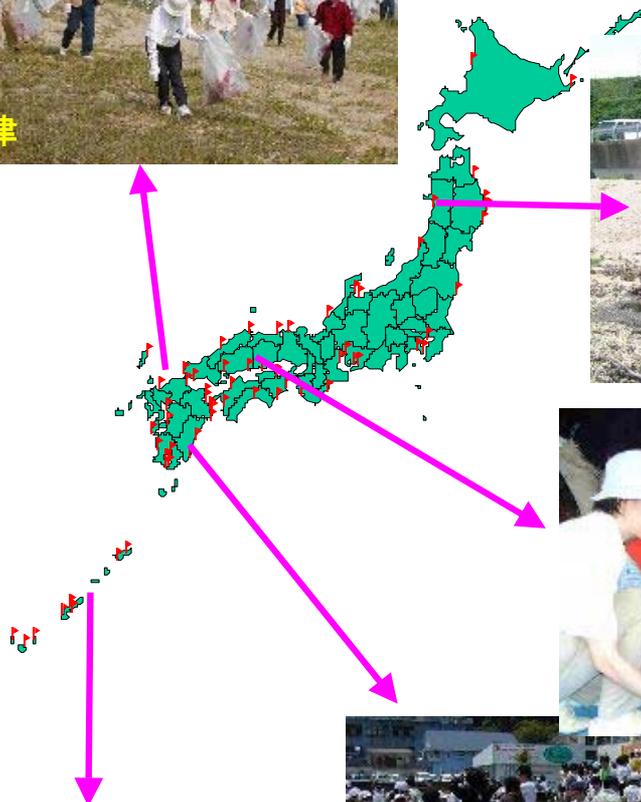
4. 連絡先：海上保安庁警備救難部環境防災課

氏名：林王弘道 内線番号：325

漂着ゴミ調査

毎年6月に「海洋環境保全推進週間」を設け、その期間に重点的に開催しています(推進週間は、11月にも規模を縮小して実施)。

今年は、全国65個所で開催され小中学生など一般市民5528人しの参加を得られました。



平成 14 年 11 月 7 日
国 土 交 通 省

連携施策についての情報交換

連携施策名 交通バリアフリー教室

1 . 背景

急速な高齢化や身体障害者の自立と社会参加の要請に適切に対応し、高齢者、身体障害者等が公共交通機関を円滑に利用できるようにするため、国として、施設整備(ハード面)だけではなく、手助けがしやすい環境づくり(ソフト面)を行うことが求められている。

2 . 目的

国民一般が高齢者、身体障害者等に対する介助等の体験等を行うことを通じて、交通バリアフリーについての理解を深めるとともに、ボランティアに関する意識を醸成し、誰もが高齢者、身体障害者等に対し、自然に快くサポートできる「心のバリアフリー」社会の実現を目指す。

3 . 施策の概要(対象、内容、効果)

対象 : 広く国民一般
実施主体 : 国土交通省地方運輸局が、地方公共団体、教育委員会、公共交通事業者、福祉関係団体と連携して実施
教室の内容 : 高齢者、身体障害者等の介助体験・擬似体験
実施個所 : 平成 13 年度は全国 10 か所で実施。平成 14 年度は全国 26 か所で実施予定。

4 . 連絡先 : 総合政策局交通消費者行政課

氏名 榎田泰宏 内線番号 25503

交通バリアフリー教室

一般市民が高齢者、身体障害者の介助体験、疑似体験等を行うことにより、交通バリアフリーについての理解を深めるとともに、ボランティアに関する意識を高め、「心のバリアフリー」社会の実現を目指す。

国土交通省地方運輸局が、地方公共団体、教育委員会、公共交通事業者、福祉関係団体と連携して実施。

平成13年度は全国10か所で実施。平成14年度は全国26か所で実施予定。



車椅子利用者の介助



視覚障害者の介助